

Title	再び香港の發掘に就て
Sub Title	
Author	松本, 信廣(Matsumoto, Nobuhiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1934
Jtitle	史学 Vol.13, No.1 (1934. 4) ,p.82- 82
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	餘白録
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19340400-0082

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

再び香港の發掘に就て

フィン氏の香港發掘に就ては前號一二八頁の餘白録に紹介する所あつたが、最近同氏よりその報告の第三部を惠贈された。同氏は其後の新發掘と河内に於ける研究とにより漸次知見を増大されてをるが本報告には主として石斧及び青銅斧を取扱ふてゐる。石斧を中心として最近ハイネ・ゲルデルン男により東南アジア石器時代の年代づけがなされてをるが、著者はその結論に従ひ、香港の遺跡が大體第三期のアジア大陸中部より來り、印度支那半島の中央を縦斷してマレイ半島から大洋に散布し、オーストロネシア文化となつた波に歸屬するものとなしてをる。ハイネ・ゲルデルン男の所説は乏しい各地の材料の中には隨分非科學的な發掘品も含んでの綜合で、精密な調査が今後空白な地域に悉く及ぼされぬ中は可成あやうい論斷であり、今後も定めし訂正されることと思ふ。フィン氏の様な新事實の提供者が、ゲルデルン、メンギン氏等の假説を採用してその發見を處理されるのは少し危険ではあるまいか。吾人は同氏が是等軌上の史前學者の説に惑はされず自己の所信に邁進されんことを希望する。本報告に於ては著者は香港石斧が南洋と關係あり、殊にその有肩石斧はポリネシア系のものであることを示し、香港の有肩石斧を純粹オーストロアジア系とするゲルデルン氏の説を訂正してをる。その他の石斧も印度支那、インドネシアと關係あり、とりわけ印度支那との關係は用石の上からも明證されてをる。青銅斧に於ては有肩角斧と南方式半月形斧と北方式「鏹」式斧との三種を擧げてをる。氏は第一式が支那古代の「布」と關係あるがと云ふ予の憶測を紹介されてをるが、一體有肩石斧から布が起つたと云ふ説はラクーペリーが最初に唱へ、ラウフェル之をその「Jade」七三頁—七九頁に開展してをる。未だ論議多き問題であるが、もしフィン氏發見の有肩角斧が、有肩石斧と布との中間物たることが論證されれば、支那文化の起源に南方よりの勢力を示して面白い結果になると思ふ。(松本信廣)